

呉錦堂を語る会通信

NO.21 Sep. 2015

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橋 雄三 方「呉錦堂を語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「呉錦堂を語る会通信」編集委員

発行日 2015.9.15



「呉錦堂の土地所有は栄町通1丁目にはじまる！」

去る5月9日、孫文記念館（移情閣）で開催された移情閣上棟百周年記念講演「孫文記念館の歴史—建物が語る—そして現在からの問いかけ—」（当通信第19号に講演録を掲載）のなかで、講師の足立裕司先生は、「呉錦堂は舞子海岸のこの辺りにいっぱい土地を持っていたのです。所有権を移転して、最後は自分のものにするのですが、中国人で、日本国籍のない人は土地を入手できなかったために、たぶん、先行買っていたのではないかとというのが私たちの基本的な考え方です。駅ができることを見越して、この地域の土地をずっと所有していったのだらうと思うわけです。」とおっしゃっています。

この話に触発されて、呉錦堂の土地所有について、「先行買い」についてはひとまずおき、法務局の「土地台帳」に表れたものだけを調べてみました。ここにご報告いたします。（編集委員 橋 雄三）

《1. 土地所有について調べるといこと》

呉錦堂の土地所有についての私の調査は法務局から始まりました。栄町通及び籠池通の土地なら、神戸地方法務局本局、舞子の土地なら神戸地方法務局須磨出張所ということになります。ここで、目的地番の「旧土地台帳」を閲覧し、「和紙公図」という古い図面で該当地番の位置を確認するという手順の繰り返しです。これは、大変でしたが、結構、おもしろい作業でした。ただ、探す地番がわかっていないと調べられないのはいうまでもありません。

私は、神戸華僑歴史博物館で、中華会館の法人登記関係書類の整理中、呉錦堂の二つの住所を見つけました。一つは、帰化前の身分・住所、「清國浙江省寧波府慈谿縣臣民 神戸市神戸栄町老丁目六十八番屋敷」で、もう一つは、日本国籍取得後の住所、「神戸市栄町通一丁目十七番地」です。この箇所については、次のページで詳述いたします。

《2. 錦堂、土地所有の出発点「栄町通1丁目17番」》

ここで、「…68番屋敷」は住所ですが地番ではなく、従って、土地台帳に記載はありません。もう一つの住所、「栄町通1丁目17番」で探すと、呉錦堂の名があり、登記年月日は、明治37年12月16日となっております。呉錦堂の帰化が許可されたのが明治37（1904）年11月25日なので、待ちかねたような土地所有です。

登記の際、この地番を所有・質取主住所とし、舞子の土地、「明石郡垂水村山田2028ノ3」や籠池通の土地、「神戸市籠池通5丁目10番ノ1」を次々、

所有していきます。つまり、「栄町通1丁目17番」は、呉錦堂の土地所有の出発点だったと言えます。

《3. 錦堂、活動の拠点、「栄町通1丁目17番」》

南京町の南門、海栄門の向こう、栄町通りを隔てて、三井住友海上の大きなビルが見えます。このビルの南側、現在、東方ビルがある辺り（下の写真、下段左）に呉錦堂の所有地はあり、現在の“乙仲通”に面していました。“乙仲さん”とか“乙仲通”

（下の写真、下段右は乙仲通の看板）といった言葉・名称が生まれるのは昭和14年以降のことですが、海運業や貿易業を行なう呉錦堂にとって、「…68番屋敷」の時代から、この地は港に近く、また、同業者も多く、便利だったのでしょう。



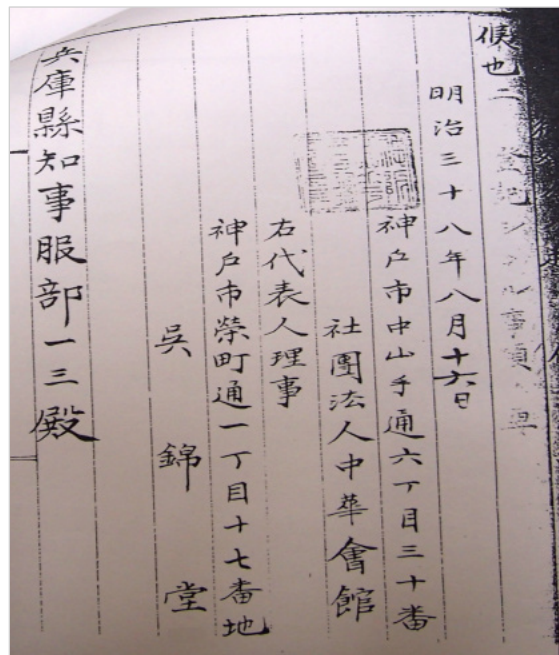
《4. 呉錦堂、日本国籍取得前後の二つの住所》

2000年発行の中華会館編『落地生根』110頁に、「1904年9月、日本国籍を取得もしくは取得申請中であつた広東幫麦少彭、福建幫王敬祥と三江幫呉錦堂の名義でそれぞれ二万円ずつの計六万円を基金として拠出し、中華会館を社団法人とする設立許可申請が代理人太田保太郎弁護士によって神戸市經由で兵庫県内務部に提出された。添付された定款は計二十四条からなる」という記述があります。これに相当する部分が下の画像です。麦少彭と王敬祥は、明治37年9月のこの時期、すでに日本国籍を取得していましたが、呉錦堂はまだ、身分は「清國浙江省寧波府慈谿縣臣民」で、住所は「神戸市神戸榮町壱丁目六十八番屋敷」だったのでした。

呉錦堂は、この年、明治37年11月25日に帰化が許可され、同年12月16日、「榮町通1丁目17番」の土地を取得・登記しております。一連の中華会館法人化関係資料中の一件、右上の画像、社団法人中華会館代表人理事呉錦堂の住所がそれです。

《5. 呉錦堂、この時期、私生活の場はどこ？》

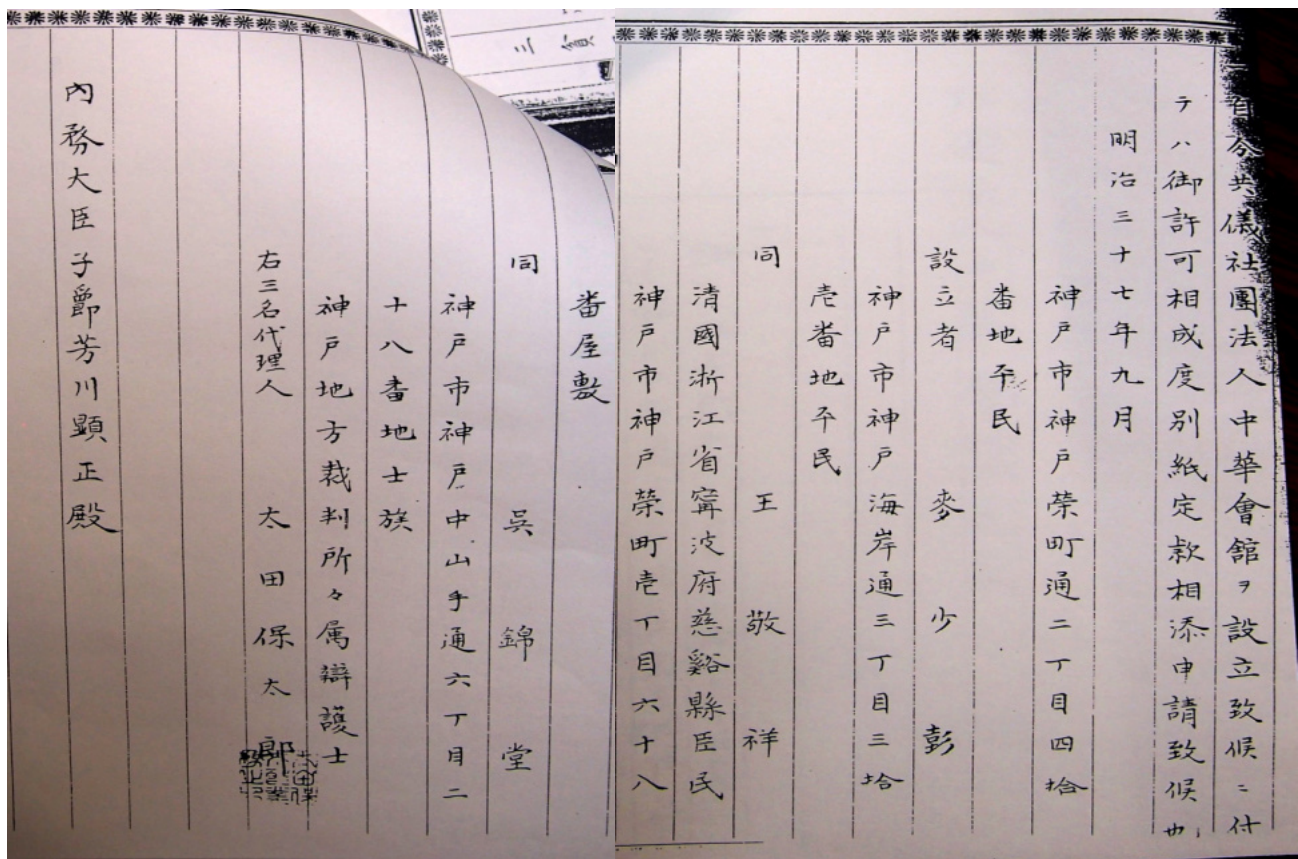
2006年、財団法人孫中山記念会発行『呉錦堂』「呉錦堂略年譜」を見ると、1890年(35歳)神戸に移住、貿易・海運会社「怡生号」創立、となっております。呉錦堂は、上海から日本に渡り、長崎、大阪を経て、神戸へ来ました。この「怡生号」という



左の画像の原資料は神戸華僑歴史博物館所蔵です

会社の所在地については、当通信23号でご報告いたします。

ところで、この頃、私生活の場はどこだったのでしょうか？中村哲夫著『移情閣遺聞』（阿吽社、1990年）の54頁に、「呉錦堂が梁啓超を自宅（現、神戸市中央区中山手）に招待し…」という件があります。また、呉錦堂の孫、伯瑄さんも、「大阪から神戸に来て、最初に住んだのは中山手だと聞いております」とおっしゃいます。中山手のどこにどんな家があったのか？あった期間は？など、どなたかご存知の方、情報提供をお願いいたします。



左の画像の原資料は神戸華僑歴史博物館所蔵です

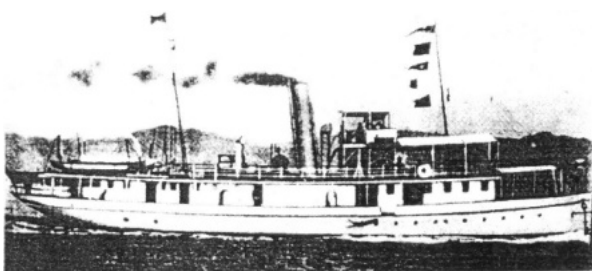
大人物小故事 (16)

我的外公吴锦堂 曹爱德著

“船”缘

中日两国一衣带水，当年我外公东渡日本经商，乘坐的是不透气的，运货的劣等船舱，最初旅居日本长崎，开始从贩销日用工业品和土特产做起。外公起早摸黑，顽强拼搏，经过多年的奋力开拓，外公才拥有了属于自己的商号“怡生号”及“义生荣号”，接着又开始了新的起点。从贸易发展到办航运，办实业，水泥株式会社等。在这繁荣的经营中，外公敏捷地感觉到运输对生意的重要，那时外公已经移居到了神户，在经济上也有相当雄厚的实力，于是就开始投资购船。有了运输工具，促使贸易事业充分地拓宽。当时在日本靠船搞运输，做生意很兴旺。凭着外公聪慧的头脑，远大的目光，就热衷于购船，尝试做大生意过瘾。我母亲告诉我，那时外公有运输船“怡生号”和“锦生号”后来甚至于还购买了一条游艇起名叫“红叶丸”。“怡生号”是专门用来运煤炭的，外公还用这条船支持过孙中山先生领导的革命事业。

当时宁波老乡虞洽卿在生意上失意的时候，特来向外公借款，外公思考以后就回答：“钱坚决不借”，一转神“看在老乡的份上，我送你一条船，你好好的去做生意！”后来虞洽卿在运输事业创业成功，成为上海宁波帮赫赫有名的人物。我母亲说：“你外公真是海量，海口！”接着母亲又说：“中国，日本乘船往返，又安全，又享受，小时候从家乡宁波到日本来回经常乘坐的是自己家的船，那情景就像做梦似的美啊！”母亲回忆起来还历历在目：蔚蓝色的天空无比辽阔，一望无际的碧绿海水，巍峨高大的山峰连绵起伏。啊！在浩瀚的宇宙中，觉得自己渺小得像一滴水珠，所以人生不要有太多计较。人生往往有太多的无奈，能忍受至今真的要感谢外公和妈妈。



【外公的游艇“红叶丸”】

“船”の縁

中日両国は一衣帯水の地であります。当時、私の祖父は、商売をしようと、船で日本へ渡りました。乗ったのは、換気の悪い貨物を積む下等の船室で、最初、日本の長崎に住居し、日用工業品と特産品の販売から始めました。祖父は朝から晩まで骨身を惜しまず働き、長年の苦闘の末、やっと、“怡生号”及び“義生榮号”という自分の商号を持ち、続いて、新しい事業を始めました。貿易から始め、海上運輸、製造業、セメント会社へと発展していきました。祖父は、この繁栄する事業経営にあつて、敏捷に、ビジネスに対する運輸の重要性に気づきました。当時、祖父はすでに、活動の場を神戸に移していましたが、経済界において相当強大な実力を持っており、船舶への投資を始めました。運輸手段を持つことによって、貿易事業を十分に広げることができました。当時、日本では、運輸は船に頼っており、商業活動は非常に旺盛でした。祖父は聡明な頭脳と先見の明を持って、夢中に船を買い、思う存分商売を行いました。母は私に、その時、お祖父さんは、“怡生号”と“錦生号”という2隻の運輸船を持っていて、そのあと、更に“紅葉丸”という遊覧船を買ったと話しました。“怡生号”は専用の石炭運搬船で、祖父は、この船を用いて孫中山先生が指導する革命事業を後押ししたことがあります。

当時、寧波の同郷人、虞洽卿は商売上、失意の時期で、特に祖父に借款を申し入れました。祖父は、考えて、「決してお銭は貸しません」と答え、その後すぐ、「故郷での身分を考えて、私はあなたに一隻の船を贈りましょう。それで、あなたは立派に商売をしてください」と言いました。のち、虞洽卿は運輸事業を興し成功し、上海寧波帮のかくかくたる著名人になりました。私の母は「あなたのお祖父さんは、本当に度量の大きな人です。」と言い、また続けて、「中国と日本を船で往復するのは安全で楽しいことです。子どものころ、故郷寧波と日本を往復するのに乗るのは、いつも、自分の家の船で、それはもう、夢を見ているように素晴らしいことでした」と言いました。母は、比べるものがないほど広々とした青い空、見わたす限り果てしないエメラルドグリーン的大海、高くそびえ連綿と続く山なみが、ありありと目に浮かんでくるようでした。ああ！広大な宇宙にあつて、自分是一滴のしずくのようにちっぽけなのですから、人生はあまりこだわりすぎないほうがよいと思います。人生は往々にして、いかんともしがたいものですが、今に至るまで辛抱できたことを、本当に、祖父と母に感謝しなければなりません。

大人物小故事 (17)

我的外公吳錦堂

曹愛徳著

当通信第9号に始まった『大人物小故事 我的外公吳錦堂』の掲載も終盤に入りました。この間、昨年8月には、蘇州に著者の曹愛徳氏を訪ねたり、また、今年3月には、曹氏のお姉さん、魏瑜氏を移情閣（孫文記念館）にお迎えしたりと、楽しい交流が続きました。今回は「“船”の縁」と「革命に傾倒する」を掲載いたしました。お楽しみください。なお、中文欄の画像は原書にあるものです。（編集委員 橋 雄三）

倾心革命

我外公是个胸怀大志，深明大义的人，当自己的事业达到顶峰，获得巨大成功以后，他没有出大钱为家人盖大屋，为后代留大款，而想到自己是个中国人。在中国的近代史上有多少志士为寻求中华民族的复兴而上下求索，奔波，联络，呼号，积蓄力量，准备推翻满清封建统治。在这关键时刻，我外公不仅是倾心支持并积极投身与孙中山先生领导的民主革命，而且是义不容辞的成了孙中山先生革命财力的得力靠山，当时为了革命，孙中山先生多次来到日本，外公以中国国民党神户支部长的身份在自己的别墅“松海山庄”，热情的接待了孙中山先生。我妈妈说：“几乎每次外公就像久违的亲人，盛情款待，又像志同道合的好友，深谈久时。每次离开的时候，外公专门准备好几只箱子，带走的箱子都是沉甸甸的。”开展大规模的革命需要大量的资金，外公是一次一次伸出了大手，还出大力帮助提供活动的场地，以自己的别墅为同盟会活动据点，将自己的私宅“移情阁”让出，作为重要革命活动的办公室，又积极创建神户中华会馆，神户华侨同文学校。从内心到行动倾心革命，积极支持革命，为革命出大力，立大功，成为了历史伟人和我心目中崇敬的人。



【1913年吳錦堂与孙中山等合影于吳錦堂神户别庄（松海别庄）大门前】

革命に傾倒する

私の祖父は、大きな志を胸に抱いた、大義をよくわきまえた人で、自分の事業が最高峰に達し、巨大な成功をつかんだ後も、身内に家を立てるのに大金を出したりはせず、のちの時代に大金を残し、また、自分が中国人であることを念頭においていました。中国近代史上、中華民族の復興のために、正しい方法を探し求め、奔走し、繋がりをつけ、声を上げ、力量を蓄え、満清封建統治を覆す準備をした志士がどれだけいたでしょうか。この正念場で、祖父は孫中山先生が指導する民主革命を心から支持し、さらに、積極的に身を投じ、その上、孫中山先生の革命を財力で支える有力な後ろ盾となりました。当時、孫中山先生は何度も日本に来ましたが、祖父は中国国民党神戸支部長の身分で自分の別荘“松海山荘”に孫中山先生を心を込めて招待しました。母は、「ほとんどいつも、祖父は、久しぶりに会う親戚のように、厚情を持って歓待し、また、志と信念を同じくする親友のように長い時間じっくりと話をしました。いつも帰るときには、祖父は、特別に、いくつものトランクを準備しました。孫中山先生が持ち帰るトランクはどれもすべてずっしりと重いものでした」。大規模な革命を進めるには、大量の資金が必要で、祖父は、何度も援助の手を差し伸べ、また、力を尽くして活動場所を提供し、自分の別荘を同盟会活動の拠点とし、自分の私邸“移情閣”を、重要な革命運動の事務室として提供し、また、神戸中華会館、ならびに、神戸華僑同文学校を積極的に創建しました。心から行動まで、革命に傾倒し、革命を積極的に支持し、革命のために力を尽くし、大きな功績を残し、歴史上の偉人となり、また、私の心に残る崇敬する人となりました。